

農林水産省
平成 24 年度中南米日系農業者連携交流委託事業
第 2 回 国内事業推進会議 概要

日時：平成 24 年 10 月 31 日（水）14:00～16:00

会場：お茶の水会議室（穂高ビル 2 階）

参加者の人数：10 名

1. 開会（事務局より）
2. 農林水産省挨拶（都市農村交流課 課長補佐）
3. 第 2 回日系農協等連絡会議の議事概要報告（事務局より）
4. 議事
 - ・ 中南米 4 カ国の日系農協等が抱える課題の解消のための調査、内容の検討（前回に引き続き、本事業の方向性について）
 - ・ 研修先、研修内容等の決定状況の報告
5. 次回会議開催について
6. 閉会

（配付資料）

- 資料-1：委員名簿
- 資料-2：第 1 回国内事業推進会議
 - 2-1 第 1 回国内事業推進会議概要
 - 2-2 第 1 回国内事業推進会議議事録
- 資料-3：第 2 回日系農協等連絡会議議事録
- 資料-4：研修受け入れ先等進捗状況
- 資料-5：中南米リーダー人材育成研修
 - 5-1 スケジュール
 - 5-2 参加研修生一覧

<要旨>

研修の実施状況の報告

- 中南米リーダー育成人材研修：日程（11 月 11 日～12 月 8 日）・内容・人選も決定
- 中南米ふるさと交流研修：愛媛県・高知県を対象、農産物加工を中心とし、農協婦人部から参加
- 中南米研究交流：
 - ◇長期研究：3 名で進める
 - ・ブラジル人 2 名（環境・アグロフォレストリー）、東京農工大学、2012 年 10 月～2013 年 2 月
 - ・パラグアイ人 1 名（農薬分析）植物調節剤研究協会、2012 年 11 月～2013 年 2 月
 - ◇短期研究：5 名で進める
 - ・ブラジル人 1 名（柿栽培）、岐阜県農業技術センター、2012 年 10 月～11 月
 - ・ブラジル人 1 名（りんご貯蔵）、盛岡りんご園、2012 年 10 月～11 月

- ・ブラジル人1名（柑橘類）、愛媛県果樹研究センター、2012年11月～12月
残り2名はボリビア（家畜）、アルゼンチン（野菜）の候補者を想定（岡山大学で調整中）
- ▶ リーダー人材研修（南米実施）：第2回日系農協等連絡会議と兼ね、ブラジル北部ジュアゼイロのサンフランシスコ川灌漑事業の研修施設で実施
- ▶ 現地技術研修：
 - ・大豆のさび病で苦しむ地域（中心はボリビア）に旧 EMBRAPA（ブラジル農牧研究公社）のヨリノリ専門家を派遣（年4回の実施ですでに2回を実施）
 - ・愛媛から柑橘類の高木専門家を派遣、パラグアイとアルゼンチンの柑橘類農家の技術指導（柑橘類の専門家によって枝枯れ病と判別したものが、病理ではなく生理、つまり気候の問題ではないかと判明）
 - ・ブラジルの IPTDA で家畜の人工授精研修の実施を1月に予定（調整中）

第2回日系農協等連絡会議の結果報告

- ▶ 次世代を担う若い人たちが出席、これまで連携のなかったイボチ移住地の日本人会会長が出席
- ▶ 世代間のギャップについて若い世代側からも意見が上がり、農協の組織についても批判的な意見

第2回日系農協等連絡会議結果に対する議論

- ▶ 外国の農協（ドイツ系やオランダ系）の取組みから学ぶことはあり、その橋渡しはできるのでは。
- ▶ 日本に行っても栽培体系が違うため参考にならないという発言は、インタープリテーションの仕方ですら解決できる
- ▶ 三ヶ日農協清水専門家の、剪定や高接ぎといったミカンの技術をクプアスーに応用して成功した事例のように、知識も経験もある専門家がインタープリテーションし、現地と一緒に取り組む必要性
- ▶ 協同組合の組織論の問題は世界共通で、中南米に限ったことではない。
- ▶ 協同組合の組織論には、組合員組織論・農協組織を統一する意味での連合組織の組織論・経営体としての組織論の3つがある
- ▶ 教育情報基金、新規就農資金などの資金体制はどうなのか。土地を担保に取る、保証人を付けるというといったことをしているのであれば資金を借りることができるのではないか。
- ▶ 若い人たちが情報交換し合うのは第一歩であり、興味深い人選だったと思う。
- ▶ 現地での連絡会議に参加した若い人たちは組合員なのかどうか、属性をはっきりさせるべき。

事業の方向性

- ▶ うまくいっているところを参考に、日系農協同士で交流するといったことを手伝うことが、この事業でできることではないか。
- ▶ 研修の満足度は二分していて、ブラジルを中心に穀物を扱っている大きい組織の参加者からは、日本農業はあまり参考にならないという声、野菜類や果樹まで多岐にやっている中小の農協にとってはこの研修は非常にありがたく活用したいという声。

- 大型穀作経営でも、精密農業などまだまだ日本の技術から学びたいという声も大きく、分野によっては大規模農業でも日本で学ぶところは十分にあるのではないか。
- ブラジルの文化協会の文協 RURAL の委員会は、本事業で理事会（PMC）とメンバーがほとんど同じであり、今後、文協 RURAL と組んで事業を進めると、日系社会の中でより広く情報を回すことができるのでは。
- 独立の日系大農場主による講義、一方向だけではなく批判的な意見を含めた講義といった、いろいろな人を連れてきて話を聞く機会を用意できればよいのでは。
- 文協、農協に日系の情報が集約されているため、日本側はまず現地の声に耳を傾けて情報を集めることから始めること。委員会はあくまで中立で、どんな意見でも言ってくださいというスタンスである必要がある。
- 専門家は、地元の人が地域に一番合った方法をやっていることを認識し、その上でどこを直したらよいか探すということが重要。
- 日系の方々の文化適応を無視して、日本人が自分たちのやり方が一番いいと押しつけた結果、失敗した事例もある。
- 思い込みによって、解決方法に気が付かないことが多々ある。気づきを促す事業も必要ではないか。
- 日系人に絞ってしまうと間口が狭くなるので、非日系であっても日系農協のために一生懸命働いている人も事業の対象とすべき。
- 日本に来る参加者は、季節（収穫期）が理由で、参加しにくい状況がある。研修を農閑期にするなど、どうしても抜けられないという状況も考慮すべき。
- 大学での研修の場合、学部生は前期後期という枠にしばられるため、入学手続きの時期を考慮する必要がある。入学できれば農業系の大学には様々な専門の先生がいるため、関心を持つ技術を学ぶ研修をアレンジできる

次回の会議予定

- 第3回は国内事業推進会議が、南米日系農協等連絡会議に先行して実施
- メインの内容はリーダー人材育成研修参加者との議論
- 12月3日、場所は新宿を予定